思ひ出のスナップ写真（3）―創成期の薬効学教室―

田辺　忠行（2 期）

昭和31年。1956年理類2年目の私達が進んだのは、医学部薬学科の創設されたばかりの薬効学教室。スタッフは、岩本多喜男 教授 以下、小林凡郎 助教授、宇井助手、藁科助手、白崎助手の 5 名。岩本教授は東大医学部のご出身で、北海道立衛生研究所から着任されました。配属が決まった学生は、山田幸子、高橋道子、石巻恒夫、津田哲司、見上登、宮脇裕幸、田辺忠行、以上 7 名で、当時、薬効学教室は、1 年遅れで開設されたので 2 期生の我々が薬効では最上級生でした。

小林助教授からは、ドイツ語の講義の他、「推計学」の講義もありました。学生には温厚で優しく接してくれる先生でしたが、その試験問題は極めて難問が多く、1 次試験で通過したのは 40 名中 4 名でした。私も、無論、墜落。『東大時代の問題より、易しんだけどなあ』の先生のお言葉に、落ちた学生が皆で猛然と抗議。私は、辛うじて「ビーコン」で通過出来たが、「トリコン」、「テトラコン」でようやく全員が合格した。然し、推計学は深く勉強するととても役に立つ、一種の確率論である。母集団の過去から現在までの、実数の累計や傾向から、将来のあるべき数字や傾向変動を確率的にかなり高い精度で推測することができる。現実に、AI≪人工頭脳≫ の発展で天気予報がより正確になり、AI が過去のデータを集積して一流の棋士よりも強くなったし、創薬や企業の経営計画の作成にも応用出来る。

また、医学部解剖学の児玉教授や公衆衛生学の井上善十郎教授、理学部の東教授など、当時、著名な先生方々の講義も受けました。

当時、北海道では飯寿司による食中毒が頻発していた事情があり、その原因究明を目的として筆頭助手の宇井さんは、食中毒の原因である *Poturinus-E* 型菌の純粋培養をしていた。ある日、宇井さんが私達に白いベトベトした感じで、ソフトボールほどの大きさの球体を両手に抱えて示しながら、『これは、全人類 65 億人を死に至らしめる量なんだよ!!』と話したのを憶えている。

写真1：「薬効学」の岩本多喜男教授

写真 2：小林凡朗助教授「後の北里大学学長」

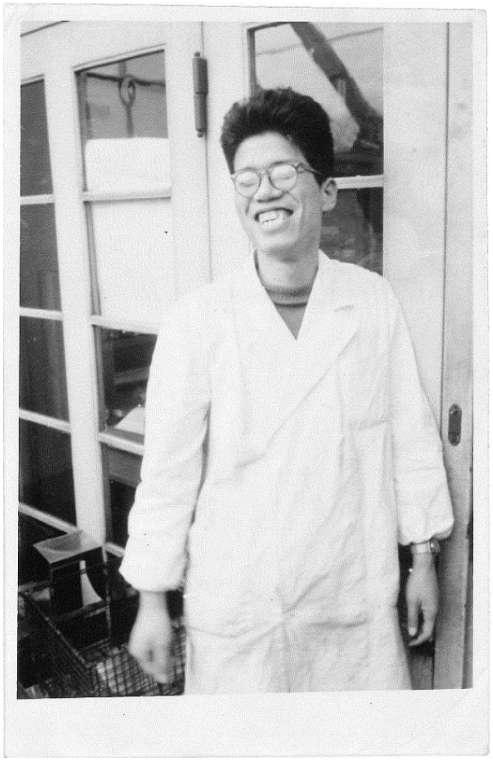
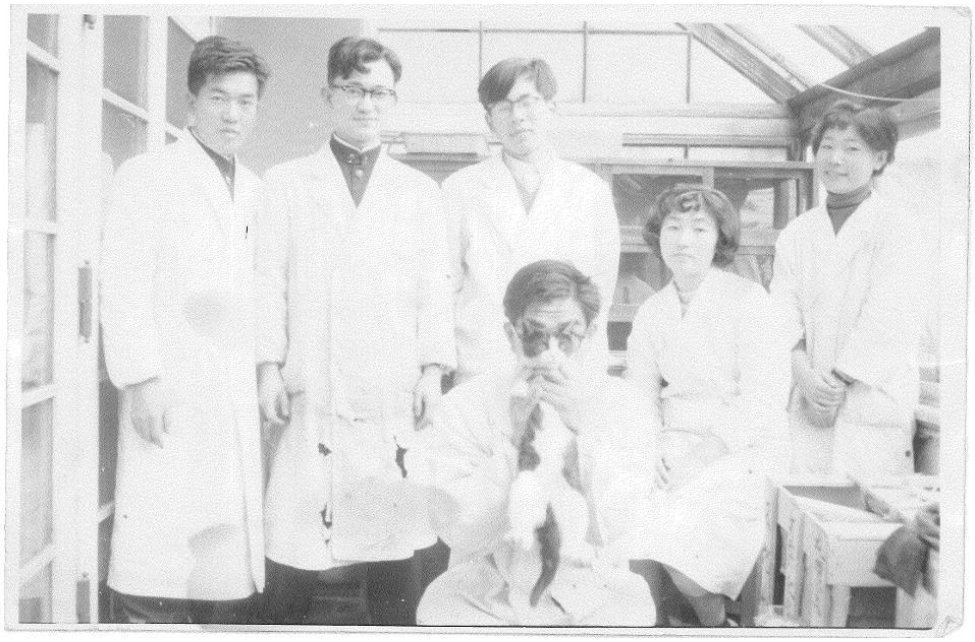


写真 3：宇井理生助手「後の北大及び東大の名誉教授」

薬効では、期せずして同じ高校の出身者が同時に 3 人揃った。学部移行後のある日、津田さんが『おい、田辺よ。お前はこの中では一番後輩なんだから、先輩の俺達にはそれなりの態度を示すべきだよな』と、私に問いかけた。石巻さんを見ると、泰然自若として満足そうに頷いていた。私は、『津田さん、何をおかしい屁理屈をおっしゃるんですか。大学ではお互い同期じゃないですか。確かに 1 番若いのは私ですから、津田さんと比較されると経験不足で、至らない点も多々あると思います。その時は、遠慮なく指摘していただきたい。然し、札幌北高の同窓会での出会いならいざ知らず、偶々同時に入学した大学では、高校時代の先輩、後輩という関係じゃぁなく、同期生として対等に付き会うのが自然で良いと思うけど、どうでしょうか？』と言って、取り敢えず頭を下げた。石巻さんは上機嫌で、『う～ん、参ったな。言われてみれば、その通りだ。津田よ、わかったな』津田さんは、やや、不満そうに無言。

石巻さん『案外、大学を出た後、かつての後輩の下で働く場合もあるかも。そんな上司と部下の関係も、これからは実力主義の時代。ありうるかもなあ。』

写真 4(下)：薬効学教室に配属された 2 期生の面々
田辺、見上、宮脇、山田、白崎さん(助手)
津田

同窓会 HP：2023 年 11 月 15 日公開